

# 浄土

1990-7

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行  
昭和二十四年四月二十八日（澤穂省 特別授承認雑誌） 第三二五号  
平成二年六月二十五日印刷 平成二年七月一日発行  
第五十六卷 七月号





## 七月の秀句

避暑らしや老の静かに庭あるき

高浜 年尾

水遊びまひるの子等の声澄める

竹山 太郎

夏山に向ひ吸ひよせられんとす

清崎 敏郎

# || 七月号 ||



末代の衆生、その行成就し難きによりて、先づ弥陀の願力に乗りて、念仏の往生を遂げて……。

——『念仏大意』

## 目 次

### 法 話

お 盆 雑 想 (上) ..... 林 純 教 ..... (2)

### ずいひつ

若 葉 の 里 ..... 合 島 近 ..... (10)

### ＜いのちを考える④＞

自 分 の 無 力 さ ..... 佐 藤 雅 彦 ..... (18)

——植物人間を看取る——

### 《四 行 詩》

睡 蓮 ..... 清 川 宗 治 ..... (9)

### 季語やぶにらみ (3)

..... 木 下 隆 一 ..... (32)

季節感を失った季語

### 読者のページ

浄土の旅は楽じゃない ..... 佐 藤 淨 啓 ..... (26)

阿茶局と春日局 ..... 細 田 隆 善 ..... (40)

表紙絵 小林治郎画

法  
話

お 盆 雑 想 (上)

田舎に育ったせいかどうか、お盆という不思議とそこら辺の藪の中に自生している青竹を斜めに切って作った高さ三尺ほどの花立てと、今あるかどうか分らないが敷島香という杉の葉で作った安い線香の独得の香りが何の理屈もこだわりもなく自然に思い出されて来る。

はやし  
林  
じゅん  
純  
きょう  
教

(東京・新宿区米迎寺住職)



急ごしらえの青竹の花立ては本堂の裏手にある、ちょうど段々畑のようになってゐる山の斜面に建てられた各家の古い墓石の前に立てられるのであるが、その青さには何故かい知れぬ清新さがただよっていた様な気がする。

そして八月十三日を中心はずっと前に嫁に行った、昔は遊んでもらったりもした誰々ちゃんやらが久し振りに自分の子供の手を引いて亡き母親や父親のお墓にお参りに来たり、平生はほとんど見かけない人などが殊勝に墓参りにやってくるのである。今思うと彼等の後ろ姿にはいつも、実家に帰って来たという安堵感と共に人の世の哀しさがあつた様に思う。それら諸々が私には數島香という線香の香りのかすかな記憶に凝縮されているのである。

日本人であるならば、私と同様、お盆にまつわる様々な思いをそれぞれに、いわば心の原風景として持っているのではないかと思う。

それほどにお盆という行事は我々日本人の肌にしみついているのである。

現在、東京及び東京近郊にかけては七月十三日から、七月十五日迄の三日間をお盆としているが、他の大部分の地域では旧暦によって八月十三日から八月十五日迄の期間をお盆

としている様である。私が育った田舎などでは九月十三日から九月十五日迄の三日間をお盆として、ごく最近までやってきた。ある人に聞いたら非常にめずらしいそうである。これは旧暦どころではないが地域的に山林が多かったりして農家が主流であったため、九月の中旬頃が農閑期に当たっていた為らしい。

ともあれ、お盆は日本人にとっては正月と共に、遠方に片付いた娘や、実家を離れて暮らしている息子達が親戚縁者と久々に顔を合わせる数少ない機会である。八月中旬の東京などはお盆帰省の為、人口が激減してガラーンとしている。その分、地方のそれぞれの郷里では久方振りに人口が増えて活気がよみがえってくるのである。その様子が毎年毎年、テレビ、新聞等で飽きる事なく報じられるのは周知の事実である。母親が子供をおんぶして両手におみやげをこれでもかという程持ち、父親は父親で両の手でそれぞれの子供の手を引いて新幹線のホームに立つという姿は、ハンで押した様に毎年見られる光景である。

何故、ああまでして郷里へと人々は向かうのか、お盆という行事の魅力故か、あるいは単なる群集心理か、それとも、たまにしか会える事のできない郷里の親兄弟への想いの故か、様々にその理由は考えられるのであろう。

他人事でなく、東京に住み、東京に生活し地方に田舎を持つ者としてその理由を様々に考え、分析してみると、お盆にああまでして人々を郷里に向かわしめる原動力は、多少の

無理を覚悟して一言でいえば、人間になりたい、せめて三日間だけでもいいから、あらゆる束縛と虚飾から解放されて生まれ育った懐しい大地の中で、草木と共に子供の時の様に生き生きと裸の人間として過ごしたいという願望にある様な気がするのである。

裏返して言えば、我々の日常がいかに束縛され不自由であり、虚飾に満ち満ちているかという事になって来る。

仏教は言うまでもなく、あらゆる束縛（自分自身を含めて）から自由になった、解き放たれた境地、悟りを目指している。そういう意味では心情的には半ば習俗と化しているお盆の三日間は仏教の教えに適っている様にも思う。

お盆の行事の起源については諸学者の間で様々に論議されているが、だいたい一定して言える事は、すでに日本には民間習俗として農耕儀礼と深く結びついた祖先の精霊を祀る精霊祭があり、広く滲透していた。そこへ仏教がもたらされてそれと半ば習合して、現在にまで到っているお盆という形が出来たというものである。

仏教側からはお盆の行事の根拠と意義付けとして「盂蘭盆経」を挙げ、その所説に基いて盂蘭盆会が営まれて来たとする。記録によれば、西暦六五七年（斉明三年）飛鳥寺の西方

で孟蘭盆会を行なったのが最初であるとする。その後、六五九年に「孟蘭盆經」を京内の諸寺に講じさせて、七世の父母に報ぜしめたとする。以後、七三年(天平五年)に大膳(宮中で膳部を司どった職)に令して孟蘭盆供養を備えさせたとされ、その後宮中で恒例行事として行なわれたとされる。後に、各国分寺を経て地方に広まっていた事は想像に難くないであらう。

いつも思うのではあるが、お盆というところ、いつも必ずといっていい程、仏教者は(私を含めて)伝家の宝刀の如く安易に何の反省もないまま型通りに、この「孟蘭盆經」を持って来て、その説く所を得々として話すのであるが、正直言って、その繰り返しの作業に最近空しさを感じるのである。危険を省りみないであえて言えば、「孟蘭盆經」が無かったとしても、あるいはもっといえば仏教がこの日本に伝来しなかったとしても、このお盆の行事の中身は、もちろんその行事の名称は違っていたはずであるが、現在にまで絶える事なく連綿として続いていたであらうと実感するのである。そのように実感する根拠は、今のお盆の行事の核心が、自らを育んでくれた山河を懐しみ、先祖を懐しみ、とりわけ母を懐しむ、という人間の時代、民族、宗教を越えた最も根本的な欲求に根ざしているからだと思うのである。私が最も強調したいのは、逆説的になるが、だからこそ、遠い昔のインドで起きたであらうと思われる仏弟子目連尊者とその最愛の母との悲劇が「孟蘭盆經」として

誕生して来たと思うのである。「孟蘭盆経」がお盆の行事を千数百年の間、インド、中国、日本の三国に亘って支えて来たのではなく、我々の心を思慕する心の、時代、民族、宗教文化を越えた普遍性がむしろ「孟蘭盆経」を「経典」として支えて来たように思う。パラドキシカルな表現だが、そこにこの「孟蘭盆経」の真価がある様に思う。

以下孟蘭盆経について少し立ち入ってみたいと思う。

「孟蘭盆経」は中国の年代で、西晋の太始二年西暦二六六年、建興元年西暦三一三年に亘って竺法護によって訳出されたというから、今から凡そ千七百数十年前にインドから中国に将来されたのであろう。この経典は、経典成立史上新しいのか古いのかよく解らないが、我々に非常に身近かな「阿弥陀経」が姚秦弘始四年西暦四〇二年に鳩摩羅什によって訳出され、またもう一つ「観無量寿経」が劉宗元嘉元年四二四年頃曇良耶舎によって訳出されている事等を比較すると、大層古い様な気がしないでもない。もっともこの「孟蘭盆経」については、ある学者によっては中国で出来た偽経典であるとする向きもあるがそんな事はどうでもいいと思っている。問題はその説かれている教えである。そこに人をして啓発し向上させる真理があるならば、その経典がインドで出来ようと、中国でできようと

さして問題はないように思う。

さてその内容であるが、かゝつまんで言う、前にも一寸触れたが、釈尊の十大弟子の一人に数えられた高弟目連尊者が、亡き母の姿を神通力によってうかがってみると、何としたことか、母は餓鬼道に堕ちており、それを悲しんで食物を供養すると、たちまち火になってしまふ。何とも自力では救う事ができないので、お釈迦に様懇願すると、汝の母親は罪根があまりに深いので、目連の力だけではどうする事もできないといひ、『安居の終つた七月十日（僧自恣）に七世の父母の苦を除き、樂を与える為に百味の飲食（たくさんのおいしいもの）を十方の多勢の修行僧に供養しなさい。そうすればその功德によって現在生きている世の父母は百歳の寿命を保ち、今は亡き七世の父母は餓鬼道から救われるであらう』と説いた。目連はその通りになして、果たして無事に母親はその餓鬼道の苦しみから救われたというものである。

この經典をいかに読むかは各自各様理解の仕方がある様に思う。

私は前に触れた様に、時代を超え、民族を超え、宗教を超えた普遍的な我々の心、即ち母を思慕して止まない心の延長線上にこの經典を位置づけ、またそれが単なるお話しではなく仏教經典という人間の正しい在り方を説いているものという観点から読み進めて行きたいと思う。

四

行

詩

睡蓮

暑さひとしお  
開いた花とまごころ交わす  
夕景涼風を願って  
一日に惜別共に休まん

清<sup>きよ</sup>

川<sup>かわ</sup>

宗<sup>そう</sup>

治<sup>じ</sup>

(詩

人)



ず  
い  
ひ  
つ

## 若葉の里



合ごう  
島じま  
近ちかし

(団体役員)

母の三回忌迎をえ、九州の山村へ帰郷してきた。

早いもので、母が逝ってからもう丸二年になる。あれだけ思いが深かったつもりでも、ふだんはすっかり忘れた状態である。いい気

なもんだ。

ちょうど五月の連休にさしかかるとあって、航空券入手にわがままが言えない。今年は前日の、しかもたっぷりあき時間ができる便になってしまった。この際、仕事は忘れて、春

の山野に心を浸そう、きめ込む。

家内が「太宰府へ行ってみたい」という。

そう言えば、太宰府在県に生まれ育っていないが、私もまだ訪ねたことがない。天気もいいし、おあつらえむきの計画になった。

両側にみやげ物屋が並ぶ参道には、修学旅行らしい高校生のグループがいく組あるぐらいで、いつもにくらべ参拝者はあまり多いほうではないらしい。

本殿は、ちょうど萱葺き屋根を葺きかえるとかで、覆いが被さったままだったが、まわりの建物は、鮮やかな朱塗りで、これが黄緑の若葉をよく調和して、晩春の陽光に映えていた。

茶店に上がりこむ。座り込んで、改めて眺める若葉いっぱい景色に、久しぶりに俳句

をつくってみようという気分になってきた。

窓の下は菖蒲池、その向こうに、なにやら記念碑みたいなものが建っていて、そのまわりに、濃紺服の幼稚園児が群れている。

碑がありて園児が群れて若葉風

まったくの写生句だが、すんなりと一句できた。でもこれは、なんの碑かわからぬより、詩碑かなんかにしたほうがいいのかも知れない。そして詩碑にするなら、「詩碑光り」というように、状態まで表現するのがよさそうだし、そうなると、結びは「風薫る」いいように思えてくる。

名物の梅ヶ餅は、焼きたての一個がうまかった。

「もっとすごいところかと思った」という家内は、本殿の建物が「川崎大師より小さかった」とイメージしたほどでなかったらしい。カメラを構えるとよくわかるが、ここも立て看板や照明用具などが目につき、菅公を偲ぶムードのじゃまをしている。

ガラガラに空いたローカル電車は、春の旅の恰好の道具建てだ。車内にも春風がみなぎる。ずうっと平野が続き、わが実家と思う方向に、山並みが霞んでいる。

### 母三忌迎える故郷の山おぼろ

九十一才という高令で天寿を全うした母。おぼろな山を見ていると、その母の霊がこもっているような気がしてくる。三回忌といえ

ば丸二年、惜別の情もやわらぎ、肉親といえども、すでに「天にあるもの」と感じているのではなからうか。そんな気持ちを句にしたつもりである。鮮烈の秋空の山並みなら、こんな感じ方はしないだろう。

法事には、年輩のほうのお坊さんがきてくれた。このお坊さんは、葬儀の読経の最中に、当の故人の俗名を「なんちゅうたかね？」と尋ねることもよくある、万事大ざっぱなご仁で、もう一人のナウイ知識も身につけた若いお坊さんとは好対照。でもお二人の評価は、うまく二分されているとか。うちの母さんは、年輩者のほうが聞き慣れていたらしい。

同じお経の筈なのに、もはや悲しみがこみあげてくる雰囲気にはならなかった。

昔の墓地はもうない。墓地山全体が掘りか

えされて、立派な納骨堂に変わっている。すぐ前に運動場や集会場も設けられ、ちょっとした公園になっている。

子供の頃、お盆前の墓掃除にひと苦勞だった。七つ違いの姉が亡くなるまでは、まったく知らない人ばかりだったせいもあるう。とにかく二十いくつもの墓のまわりには、茅や蕨など根の深い草がたくさんあって骨が折れた。でも、掃除を終えて、それぞれの墓に水をかけて帰るときは、ご先祖さまたちが、暑い中で「やれやれ、いい気持だよ」と言ってくれてるような気がしたものである。

姉が埋められるときは、すぐつらかった。そのつらさの中には、「こんな土の中に一人ぼっちで」という気持ちが含まれていたように思う。

その点、いまの納骨堂はいい。金色のお釈迦さまを囲むようにして、その部落が、文字通り一堂に会している。前庭も、何種類かの植木や花がしつらえてあって、山村にしては、小ぎれいなたたずまいだ。余命いくばくもないと思われるお婆さんが、「あたしも、もうすぐこの極楽へこれるんだね」と言ったとか。なるほど、入る身になっても、送る側でも、このほうが気が楽かも知れない。

納骨堂への道も、いまは直接自動車が乗り入れられるようになっていた。でも、昔の「墓所」への道もそのまま残っている。一人分の幅しかない道には、両側から草がかぶさるようになっていた所もあって、ときには蛇が横切ることもあった。昔、新しい死者が出ると、この道には、白い緒の草履が、一定の

間隔で、いくつも捨てられていた。冥土への旅に使われたものらしい。

道端の豆の木に、薄紫の花が咲いていた。

豆の花というのは、たくさんの花弁をつけているのに、どういうわけか華やかさを感じない。じっと内にこもっているようで、落人部落といわれるような所に似合う姿だ。

### 読経のみ渡る山里豆の花

人影もない山里に、豆の花が咲いていて、そこへ読経の音が、どこからもなく渡るようにきこえてくる、そんな感じを匂にしてみた。いずれもつとこなれたものにしたい。

とろけるような若葉を、直接肌で感じる散歩は気持ちいい。このうち柿若葉には特別の

思いがある。昔、肺結核すれすれだったらしい私は、暑さには目眩みをおこすこともしばしばで、どうやら無意識のうちに、夏に向かう季節を怖れていたフシがある。で、炎天下にもポツンポツンとある柿の葉蔭をオアシスのように感じていたようだ。

ところで、今回妙なことに気がついた。というのは道端や川岸にある柿の木が、昔とちっとも変わっていないのである。念のため何人かの人に確かめてみたら、「そういわれれば、おどんがこまかときとおんなじだなあ」ということであつた。ちゃんとした栽培用なら別だが、こんな所の自然のものは、あまり成長しないのかも知れない。

昔ながらの、思わず触れてみたくなる柿若葉を随所に配した山村も、おおかたは代変り

した。廃家になっている所もある。

### 代変り廃家もありて柿若葉

ひと部落、およそ六十軒が、みな同族のよ  
うな、この静かな山里に、二年前、とんだド  
ラマが展開した。うちの母が逝ったあと、た  
て続けに三人が亡くなったのである。一週間  
に四人もの葬式を出すといつて気味悪がられ  
た。うち二人はまだ実年期の人で、一人は筍  
山からの転落死、もう一人は自殺である。

変な空気につつまれているとき、妙な話が  
持ち込まれた。転落死した家のみかん山の貯  
水池の水が血の色になっている、というので  
ある。すぐ傍に全く同種の池があるが、これ  
は普通の色、どうみてもおかしいと、何人も

が青ざめている。

これはまずい。このまま放置すれば、恐怖  
話が定着してしまふ。きつとなにか科学的理  
由がある筈だが思いつかない。私は瓶を用意  
して、現場へ見に行った。汲み取った水を、  
しかるべき機関で、科学的に分析してもらお  
うと思ったのである。

池の色は、茶色に濁っている程度である。  
現場を見ているうちにこれだと思つた。貯水  
池におおいかぶさるように大きな杷の木があ  
り、たくさんの落葉がちらばっている。当然  
池の中にもいっぱい沈んでいる筈だ。杷の葉  
は重いから、強風でも隣の池には届くまい。

「なあんだ、この葉っぱのせいぢやないか。  
杷の葉といえは煎じ薬にも使われるくらいだ  
よ」と、汲み取った水を、持ち帰って沸かし、

率先して飲んでみせた。みんなも舐めてみて、「なあんだ」と、笑顔を取り戻し、数時間の恐喜劇はチョンとなった。

今回、一日柳川に遊んだ。高校のときの校長先生が、去年亡くなられたのにご無礼していたので、親しい同級生二人とお焼香させてもらった。

久しぶりに見るわが母校は、とてつもなく大きく、しかもハイカラになって、自転車通っていたときの木造の想影はない。なんにしても、発展している母校を見るのはうれしい。

想い出をたどりながら、柳川の外町を三人でブラブラ。白秋の生家や詩碑でゆっくりできたのも満足だったが、私は別に思わぬ楽しさを味えた。

高校の時、よく泊めてもらった友人のおばさんの家が、たしかここら辺だったと訪ねてみたら、その家には、『武家屋敷跡』と書かれた杭が建てられ、「勝手に入らないでください」とある。中はひっそりとしているが、無人ではないようだ。とにかく庭だけでも見てみたい。で私は、その許しを乞うてみた。

「失礼ですがどなたさまでしようか？」

「あのう、私はずうっと前、その高校に通ってた合島という者ですが」

「あら、合島さんね、わあ久しぶり、さ、どうぞどうぞ」

うれしかった。とてもうれしかった。同時に、これまでの無沙汰を悔いた。

久しぶりに見るおばさん（敢えてそう呼ばせてもらった）は、「もう七十五よ」と言いなが

らも、すてきな若奥様だった上品さは、いまもちっとも変わらない。お茶をご馳走になりながらつい長居してしまった。

### 武家屋敷泰然として若葉風

古いものと新緑とのとり合わせでも、この場合、若葉では、色も風も弱い。武家屋敷には、竹藪かなんか持ってきたら、いいのができるかも知れない。

おばさんへの敬意を表するつもりだったが、とうとううまい句がでなかった。

母はいなくなっても、まだ兄たちは健在だし、甥達も懸命に家業を守ってくれている。帰郷する楽しみは持ち続けたものだ。

兄の家のトイレに貼り紙がしてあった。甥

の娘で、まだ小学生の子の書に違いない（あとで確かめたらそうだった）。その貼紙には、真中に黒字で大きな「禁煙」の文字が座り、右横に朱で「おとうさんだけ」と書かれ、さらに左側に、やはり朱で「がんばってね」と添えてある。

お父さんの健康を気遣って「禁煙」と書いてはみたものの、七十を過ぎたぢいちゃんまでやめさせるのは気の毒だ。だから、「お父さんだけ」、でもそうなるとお父さんがかわいそうになってくる。「がんばってね」には、言葉では言い尽せない限りない情愛がこめられているように思う。

若葉の里には、母の心も立派に甦っていると思いたい。

## 自分の無力さ

— 植物人間を看取る —

佐<sup>さ</sup>藤<sup>とう</sup>雅<sup>まさ</sup>彦<sup>ひこ</sup>



集中治療室から、一般の病棟へ移れる状態になったとき、病院は我々に難問を投げかけた。転院の通告である。入院中の日本医科大学から、脳外科のある亀有

の分院へ移るようにと告げられたのだ。千駄木の日医大へは、歩いて五分、亀有だと車でも、地下鉄でも一時間以上はかかる。私たちは、なんとか、今のまま病

院を移らずにすむよう懇願した。当初、病院のその通告は、冷酷な情のない仕打ちに思われてならなかった。しかし、それは医療という枠組みの中では、至極、当たり前 の処置であることに違いない。私たちに とっての「おばさん」は、病院の中で、意識を回復する見込みのない、治療の有効性を全く認められない一患者にすぎないのだ。数に、限りのあるベッドは、助かるかもしれない、救命できる可能性のある患者たちが、いくらでもその順番を待っているのだ。施設の整った大病院のベッドでは、治療を有効にいかすための配慮が、いつもなされていなければならないはずである。

結局、永年の交際を、病院関係者とも

ちつづけていた住職の人脈により、転院は、免れることになった。病院側の苦慮がうかがえたのは、集中治療室から最初に移った部屋が、内科病棟の個室であったことからだ。

新しい病室に移っても、一週間は、二十四時間体制の付き添いは続いた。完全看護の大病院であっても、容態は、いつ急変するかもしれない極めて危険な状態には、変わりがなかったからだ。集中治療室の待合室で時を過ごしたように、我々は、朝から昼、昼から夕刻、夕刻から夜十時位、そして朝までと、四交替制で、ほとんど身動きをしないおばさんの

横たわるベッドの枕元の椅子に腰かけた。

鼻へと栄養を与える管が二本入り、口には透明のビニール製でできた酸素マスク、腕には点滴、そして被った薄い布団から、ただ一つベッドの下へ吊るした袋へのびる管、尿道からの排尿処理をうながすための管である。酸素マスクから酸素を送り込まれていても、それを吸入しているのは、おばさん自身の生命力によるものだ。意識は無くとも、心臓の活動を指令し、呼吸は脳の働きによって成り立っている。今日の科学的な力では、意識の回復はあり得ない、まさに、植物状態の人間、「植物人間」に相異なる。寝返りを打つわけでもなく、手足が動くわ

けでもない。おばさんの生きている証<sup>あか</sup>しは、平均して二時間に一度ほどある「咳<sup>せき</sup>」によって明らかなものになる。気管支に人工的な管を挿入しているため、元来、体質的にも気管支の弱いおばさんは、炎症をおこし咳を多発する。それがひどい状態になると、呼吸困難におちいる危険がある。そのとき、我々、そばに付き添うものが、枕元のベルとインターホンで、ナースステーションに連絡をする。それが我々の重大な責務であった。看護婦さんは、三十分、もしくは一時間に一回、必ず巡回して下さり、顔色をみて、気管支に溜った痰を、吸入器で吸い取り、床ずれを防ぐために、背中の下に枕を一つ入れ、体を、右、左と交互に傾む

かせてくれる。そんな時、看護婦さんの少しでも役に立てばと、枕を右から左へ動かすぐらいの手伝いは、気慰みにさせてもらう。

それにしても、おぼさんの入院中、助けられた、いや救われたと思ったのは、看護婦さん達の献身的な一つ一つの態度であった。それは、我々が、誰かそばにいて監視しているからというような、外野を意識したものではない。一人の病人、患者に対する人としての対応のしかただった。看護婦さんが、患者を呼ぶとき、抽象的な呼称を使つてはならず、なるべく、その人が、元気な時、呼ばれていた名前で呼びかけることは、看護の常識だとは知っていた。おぼさんの場合

も、彼女たちは、七十数歳の年齢でも「おぼあちゃん」などと決して呼びはしなかった。二十歳そこそこの彼女たちが、何を呼ばれても全く反応しないおぼさんに「小池さん、気分はどう？」「小池さん、気持ちよくしてあげますよ」、「小池さん、小池さん」と、幾度も幾度もくり返し呼びかけてくれる。そして明るい。我々、身内のものが、もう、とくに諦めかけている、人としてのコミュニケーションを失った植物状態の人に、彼女たちはいとも平然と、コミュニケーションを持つとうとしている。私は、花を一輪差しに活けて、二箇所別々に置いたとき、片方には、何もこちらからはたらしかけをせず、片方には、「おまえは

美しいね、キレイだね」と言葉をかけてあげることで、両者の「咲きよう」に異なりがあるというレポートを、どこかで読んだことを、ふと想起した。また、人間の意識の中で一般的に、最後まで反応を持つとするのは聴覚であり、いかに語りかけが重要だということも知っていた。それらのことから、若き看護婦たちの、もの惜しみしない看護の態度に、まさに菩薩の姿をみる思いがしてならなかった。

集中治療室の待合いと比べ、どんなにか精神的に楽だと思えたのは、やはり個室であったことだろう。意識の全くない

人が横たわっている部屋には、使うすべのない、流し場があり、トイレがあり、シャワールームまである豪華さだ。夜中など、椅子を二つ並べた上に、毛布を被って横になって仮眠していると、時おり、おばさんの咳こみの激しさに眼をさまされる。それは大事なく、すぐにおさまるのだが、それでもおばさんは、そばで呼吸をしている。おばさんの生命と、私の生命は、間近に、隣合せの手の届く位置にあるのだ。時おり、手を握る。無論、反応などない。昼間、布団からベッドの下へ吊るされたビニール袋へ小水が管から流れ落ちるとき、管から袋へ落ちきらず、管の中にとどこおっているときがある。そんな時は、生温い管をつまん

で、袋へ流れやすいようにしてあげる。  
また、看護婦さんが、吸入器で、痰を取り去った後、多量の唾液が、口もとから枕へ流れる。それを、ガーゼやティッシュでふきとってあげる。僅か、それぐらいが、我々にできる仕事である。そんな付き添いの仕事をしながら、私は、ふと思った。

今日か明日か、はたまた何か月先のことか眼の前に死んでゆくだろう身内の生命がある。夜通し、咳による呼吸困難を看視する、看護婦さんの手伝いをする、汚れた洗濯物を持ち帰る、こんなことは、付き添いをする者なら、誰でもすることだろう。宗教家として、仏教を学ぶ者として出来ることは何なのだろう。

宗教家としての無力さ加減を痛感したのは、その時だけではなかったのだ。

自分の息子が、不慮の事故に遭遇したとき私はいつもの私として平然としていることができるだろうか。いや、それは、凡夫であれば、動転するのが当たり前のことだろう。それでは宗教家として、息子の事故に嘆き悲しむ親たちに、どう接したらいいんだろう。私は、何もできずに茫然としていた。

それは、集中治療室の待合いにいるとき起った出来事だった。病状の快方を念じながらも、一本の容態を告げる電話に、絶望的な情景を思い浮かべながら、

ただ「待つ」ために長椅子に座る人々。もし、そこに人の心を柔らげる徳をもつ偉大な宗教家がいたならば、家族のために、悩み苦しみ、これからの先行きに不安を満面に浮かべた長椅子の人たちの傍に、そっと静かに腰をおろし、「どうしました。具合いのお悪いのはお母さんですか？」と優しい言葉をかけ、ひととき、苦しむ人の悩みを吐き出させ、少しでも「安らぎ」の時間を与えているのかもしれない。しかし、私は、私自身のおばさんとの別れに泣いていた。

そんな時、若い夫婦と、六十位になるだろうか、その父らしき人の三人が、待合室の隅に席を取った。二日ほどの間、我々共々、沈黙の時間を「待つ」た

めに費やした。三日目だったか、四十代初め位の作業服を着た男性が、彼の会社の管理者らしき年長の男性に付き添われて待合室の戸を開けた。彼らは、三人の親子に向かって歩を進め立ち止まり、そして言った。

「この度は、とんだことになりました、お詫びの申し上げようありません」

上司は頭を下げ、作業服の男性も頭を下なだれた。若い夫婦の夫の方が、うつ伏せていた頭をもたげて、作業服の男をキッとにらみ、その胸ぐらを驚把みにして、「息子を、どうしてくれるんだ！」と怒声をあげた。中を割るように、父が入って、静かにうながし、室外へ、彼らは話をするために出ていった。

あとで、人伝に聞けば、雨上りの濡れた道路をおぼえたばかりの自転車で、若い夫婦の息子六才は、遊んでいたという。そこへ通りかかったトラックの横で、小さな自転車は、ぬかるみに転倒し、トラックの後輪に接触し、子供は意識不明の重体で集中治療室へ入っているのだ。トラックの運転手に全く過失はない。悲しい縁が、幸せな家庭を巻きこんだのだろう。泣いて、怒りを運転手にぶつけることしかできない、この親子、集中治療室の待合室には、今まさに生と死のはざまに苦しみあえぐ人たちの人間模様があった。

ただ無力な私には、祈りを捧げることしかできなかった。

(つづく)

### ◎「維持会員」への

#### ご加入のお願い!

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十六巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っています。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

# 浄土の旅は楽じゃない



佐藤 浄啓

過去の学者も信仰家も、死を真剣に考えていた。死の研究は現代でも哲学者たちによって続けられている。宗教は死の

研究から産れたもののようである。神話の誕生も、死の思索から生じたものである。

死の不思議は、死の神秘を深めて、遂に死は不明の儘、復活とか来世という言葉に落ちついたと、あれこれの本に書いてある。

落ちついたが、復活したり来世などという未知の世界は信じられないが、己が死は確実に信じ暮しているようだ。無意識に自分の死、生物の死を容認しているところに祈りが生れているのかも知れない。

自分の当然な死に対する祈りは、やがて他人の死に対しても祈ることは、死を理解しているからであろう。死を認めない人の思索から信仰は生れないと思うの

である。

三千年の昔から、インド最高の宗教家から、現代人に至るまで、哲学者が目指したものは総て「死の意味」だった。

「意味」は不明だが「死」を認めていた。

解明され得ない困難な作業に挑む心情は、単に死の恐怖から逃れようとするだけでなく、死を幸福なものに置き換えようとする願望だったかも知れない。

人の生と死の間には、測り知れない無限の距離があるからであろう。

月世界に人間が到着したり、ボイジャー二号が海王星まで届く科学万能時代だ

が、死は不可解で施しようのない遠い彼方のものようである。

ソクラテスもプラトンも、モンテーニユも「死を哲学するには余りにも神秘すぎる」と言うし、ショーペンハウエルは「死というものは真に靈感を与える哲学の天才である」と言ったり、トーマス・マンは「死というものが無かったら、この世に詩人は生まれなかったろう」と、死について考えることを諦らめてしまった。

人間に感得できる宇宙は、精神的宇宙と物理的宇宙という言葉だけで、実体は

どちらも掴みどころのない、不可解極まることばかりである。

宇宙空間が、とてつもなく壮大無限だと実感させられたものに、一昨年マスコミによつて報道されたボイジャー二号である。我々は「超」のつく距離は実感に乏しい。新幹線が二百五十で走る早さは、見たり聞いたりして納得しても、ボイジャーが十二年間も飛び続け、太陽系最後の訪問先、海王星に接近したという距離が七十一億キロメートルという数字で読まされても、どれだけ遠い距離なのか見当がつかない。

距離や速度の感覚は、スポーツで使わ

れるボールの如く、見慣れたものは概ね判断できても、十億だとか百億などときかされても実感が伴わない。死の意味の曖昧さと似た感覚で七十一億キロメートルを計算しているようなものである。

現代はコンピュータで簡単に零を並べて計算可能だが、それは零や数字の羅列にすぎず、人間の感覚ではない。

それにしても、零が幾つ並ぶのか分からない七十一億キロメートルの彼方から、十二年前に取り付けられた古カメラが、海王星の映像を送り届けて来たのも不思議なほど遠いのである。

「不思議なほど遠い」という「不思議」

は、インド以来の仏典にも説かれるように、数字の単位として考え出している。

不思議な数字のお手本である。

「零」の数を発見したのもインドだと聞いているが、中国では無限の数字を創造したようだ。

壹から始まり、拾、百、千、万となり、万以上は一万倍毎に億に進み……。

この億とか兆くらいまでは、国家予算とか企業の稼働する数字として、毎日の新聞から実感は乏しいが、その大きさを知らされているものの、その上に京、垓、穰、溝、澗、正、載、極と続く。

このあたりまでは何となく記憶にある

ような無いような気がするが、これから上は正に宇宙的、幻想的数字なのである。恒河沙、阿僧祇、那由他、不可思議、そして遂に無量大数という単位で終るが、無量大数は終止ではない。この先に無限な数字が隠れているという意味があるのだ。

恒河沙から先は単なる数字とは思えない。仏教哲学から生れた字配りのようである。仏教でいう宇宙観は、恒河沙から無量大数に至る、いやそれ以上を指しているとすれば、ボージャー二号の七十一億キロメートルという距離は、仏教の悟りの距離からすれば、ほんの宇宙の入口

附近を、うろついているのだろう。

科学も遠大な、途方もない進歩を遂げてはいるが、仏教的宇宙には到達できないだろう。

中国とかインドの賢者は、大陸的観想で物事を判断する。島国日本人とは觀念的な違いは当然だが、スケールの大きさには驚く。

日本人は、その数字がいい加減大きくなると無限大といって誤魔化そうとするが、彼らは「無量」という言葉を使う。計り知れない数字というのも存在する意味で仏教的である。

小数でも同じことで、「分」から始ま

り、厘、毫、糸と続く。忽、微、逡巡、須臾、瞬息、ここまでくると息もたええになる字配りで、真実、息の詰まる思いだが、更に進んで弾指、刹那と涯しく、コンマ以下が二十一もあって、闇黒の世界に落ちて行く様が彷彿されて怖ろしいくらいだ。

ボイジャー二号は役目を果し終え、永遠の謎の国、無量大数の宇宙に旅立った。

信者の多くは、十万億土の宇宙に憧憬していても、行けそうで行けない距離がある。仏教の涯の十万億土は気の遠くな

る無限の闇の一隅の灯りを凝視しているに過ぎないのだろうか。

ならば、過去の賢者たらずとも、「死」の实在が「無」なら、祈りしか残されていない。

祈りは心の慰安かも知れないが……。さてさて、宇宙の判りにくさと、仏教の判りにくさは似ているが、この世も、あの世も分りにくい。

判っているのは息耐えだえの数字が教えてくれるように、不可思議刹那で瞬息だということぐらいだろう。

浄土は旅は楽じゃない。

季語やぶにらみ (三)

季節感を失った季語

木の<sup>きの</sup>下<sup>した</sup>隆<sup>りゅう</sup> — いち

(随筆家)

生活様式の変化とともに、我々の身辺から消えざるを得なくなった季語のいかに多いことよ。野菜や果物の多くは、温度やビニールハウスでの促成栽培で季節感を無くしてしまつたし、それに加えて遺伝子の組み換えなど

の技術革新によって品質はますます画一的になり、本来そのものが持っていた匂いも味も失ってしまった。年中出回っているトマトやキュウリにしても、昔はトマトはあくまでもトマトらしく、キュウリはあくまでもキュウ

リ臭かったからこそ、トマトでありキュウリであった。しかし、いまそんなものが食べたければ、自分で作る以外に方法はないのである。それも防虫用の薬剤や人工肥料に頼らず、有機肥料を入れて土の改良から始めなければ、味のよいものを作ることは出来ない。なるべく自然に近い状態で収穫しようというのだから、収量はしれている。増収増益を図る農家が、そんな割に合わないことをするわけはなく、その結果、我々はトマトのようなもの、キュウリのようなものを食べさせられているのである。

園芸品種の花弁についても同じことが言える。クリスマス前後から花屋の店頭を賑わすシクラメン、一鉢三千円以上ともなると、ばかばかしくて買う気になれないが、もともと

は春咲きのサクラ草科の植物なのである。あのシクラメンに、昔は薫りがあったというが、少なくとも私が知ってからのシクラメンには薫りはない。交配に交配を重ねて、花の色と変わり種を追求しているうちに、薫りの方は忘れられてしまったのであろう。そしていつしか春の花から冬の花へ変身させられてしまった。原産地は中近東のシリアとも地中海地方とも言われている。そこで、どんな環境で育っているのか知る由もないが、恐らく原生種は何らかの薫りを持って、細々と咲いていることだろう。

夏の歳時記を開いてみても、季節感を失った季語や、昭和七年生まれの私でさえ概念でしかとらえられなくなってしまった季語が数多く見られる。ビールやアイスクリームはも

はや夏の季語とは言えないし、夏の台所の脇役として出番のあった蠅帳（蠅入らず）、町の魚屋などでよく見かけた硝子製の蠅取り瓶、蠅取りリボンと言ったものも、いつの間にか姿を消してしまった。夏の生活には不可欠なものであった蚊帳もその一つである。私は昭和三十年代の初めに世帯を持ったが、既に蚊帳を必要としなかった。

#### 垂乳根の母がつりたる青蚊帳を

すがしと寝ねつたるみたれども

という長塚節の短歌が高校受験のテキストに出ていて、たちねが母の枕詞であることと、この短歌が倒置法で構成されていることなどを出題の眼目にしていたが、教える側は青蚊帳の説明から始めなくてはならないとすれば、これは厄介だな、と思わざるを得ない。

ましてや教師自身が蚊帳を知らない年代の人だったりすると、話は一層ややこしくなる。子供の昼寝用に使った母衣蚊帳・枕蚊帳に至っては、我々の年代なら蠅除の大きなやつと言えば辛うじて説明がつくかと思うが、見たことも聞いたこともない現代の子供には、図解しても納得してもらえるかどうか、甚だ心許無い。

青蚊帳の海の底いに寝しづもり 篠田二郎  
という風流を味わいたければ、いまではかなり山奥の温泉宿、それも昔ながらのたたずまいの旅館にでも行かないことには、思いは達せられないのではないだろうか。とすれば、これは一種の贅沢ということになる。

蚊遣という言葉も、殆ど死語に近くなってしまった。渦巻状の蚊取線香が、煙の出ない

電気蚊取り器に取って替わられたご時世に、松・杉などの針葉樹の葉や干した蓬や蜜柑の皮を燻すという原始的な方法を頑なに守っている家があるとは思えないが、これには蚊を追う他に、湿気臭さを紛らすという効用もあった。蚊遣火というくらいだから、蚊遣はやはり火がついていて、煙が出なければ感じが出ない。極く極く弱い電熱板の上に薬剤をしみ込ませたマットを置き、その薬剤を蒸発させる電気蚊取り器は手軽で効き目も線香より遙かに強力だが、どうもなじめない。それにしても、あの渦巻状の蚊取り線香を発明したのは誰だったのか。棒状の線香を渦巻状にしたアイデアもさることながら、更にそれを二つ裏表にして組み合わせ、コンパクトに収めたデザイン感覚は只者ではない。しかし、こ

の線香もいまでは主原料の除虫菊が合成化学薬品に替わり、昔の薫りは失せてしまった。除虫菊の需要が減少したため、栽培も廃れた。主産地であった広島県の因島でも、全島を真っ白な花で埋め尽くす光景は初夏の風物詩として親しまれてきたが、見られなくなって久しいという。

蚊遣で忘れられないのは、線香立に使われる素焼の豚の容れ物である。正式の呼び名は何というのか知らないが、持ち運びに便利のように、背中に細い棕櫚縄で作った輪っかが付けられていたりして、なかなかユーモラスなものであった。毎年いまごろになると、決まって荒物屋の店頭に現れたものだが、いまも売られているのだろうか。観光地の土産物屋では、時々釉薬をかけたいかにも民芸品で

ございといった豚を見かけるが、これは面白くも何ともない。線香立の豚は素焼に限るのである。

いつのころからあったものなのか、また、どここの窯場で焼かれていたものなのか、なぜ他の動物でなくて豚なのか——私にはそれらについて調べる手立はないが、原型は名もない陶工の手すさびから生まれたであろうことは想像するに難くない。そして、非凡な才能の持ち主であったが、奔放不羈な性格が災いして、不遇のうちに世を去ったと思いたいのである。でなければ、あれほどまでにとげた味が出せるわけがないのである。

縁台に、除虫菊で作った蚊取り線香を吞み込んだ素焼の豚の線香立を置き、浴衣がけで冷えたビールの満を引——くというのは、も

う現代では許されない贅沢になってしまったのであろうか。

季節感を失った季語と言えば語弊があるかもしれないが、曖昧な使い方をされている言葉に「五月晴れ」がある。この言葉を見たり聞いたりすると、ふっと私の頭に二人の人の名が浮かぶ。一人は詩人の佐藤春夫で、もう一人は文芸評論家の山本健吉である。どちらも言葉を大事にした人であったが、「五月晴れ」に関する限り、どちらも解釈の相違があるような気がする。

「五月晴れ」とは何か。少し長くなるが、「日本大歳時記」から飯田龍太の言を引く。

五月をサツキと読む場合は陰暦の呼称。季節は梅雨のさ中になり、五月晴れは梅雨の晴れ間を指すのが本義。したがって「陽暦五月

いろの快晴を五月晴と言っているが、誤である」(山本健吉)ということになる。しかし、誤用がいまは一般化して「風薫る五月晴れのこのよき日に」などという挨拶をしばしば耳にする。陰陽の区別が混同して用いられてしまった一例。

ということになる。山本健吉は亡くなるまで、執念のようにこの時期になると五月晴れの誤用について言い続けた。

——今日は六月五日。端午の節供である。日本中で。ただし、東京を除き。東京っ子はせっかちだから、明治の新暦以来、端午の日を新暦五月五日に繰り上げてしまった。だが東京以外の人たちは、関西でも東北でも九州でも、これではあまりに早過ぎて、せっかくのあやめもまだ咲かない季節で、ためらうこ

となく、節供の日を一月おくれにしまった。だから、九州生れの私の感覚では、さつき晴れの空にへんぼんと鯉の吹流しがひるがえるのは、陽暦六月のことである。(中略)これが本当のさつき鯉で、この空が本当のさつき晴れである。こういう感じを抱いている日本人は、私の外にも大勢いるはずだ。(後略)

と、「さつき晴れ」という一文を遺しているが、孤軍奮闘の感がなくもなく、近ごろではマスコミでも気象通報でも、陽暦五月の晴天をさつき晴れと言ってはばからない。無知なレポーターに至っては、四月の下旬からさつき晴れを口にする。もっともこれは論外だが、そのうち、梅雨晴れを五月晴れと言ったら、バーカと悔蔑の目で見られる日が来るかもしれない。その日はそう遠くないのではな

いだらうか。

塵まみれなる街路樹に／哀れなる五月来に  
けり／石だたみ都大路を歩みつ／恋しきや  
何ぞわが故郷／あさもよし紀の国の／傘婁の  
海山／夏みかんたわわに実り／橘の花咲くな  
べに／とよもして啼くほととぎす／心してな  
散らしそかのよき花を／朝霧か若かりし日の  
／わが夢ぞ／そこに狭霧らふ／朝雲か望郷の  
／わが心こそそこにいざよへ／空青し山青し  
海青し／日はかがやかに／南国の五月晴こそ  
ゆたかなれ（後略）

佐藤春夫の「望郷五月歌」の一節である。

この詩は高校三年の国語の教科書に出ていたから、私の年代の人は覚えがあるはずである。佐藤春夫に親しむきっかけとなった、私には懐かしい詩である。「五月歌」を「さつきう

た」と習ったように記憶していたが、この項を書くにあたって、新潮社版の「佐藤春夫集」で確かめてみると、「ごぐわつか」とルビがふられていた。成程、埃だらけの街路樹のたわわに実った夏蜜柑、花橘、ほととぎす、更に空青し山青し海青しとくれば、どれもこれも陽暦五月の景物であって、陰暦五月、梅雨の季節のイメージは湧かない。詩の中の「五月」は修辞上「さつき」としたのであるうか。昨今の誤用を招いた根源は、案外こんなところにあつたのかもしれない。

五月晴の句では、加藤知世子の、  
かしは手の二つ目は澄み五月晴  
が、私は好きである。

（この頃終わり）

## ○「浄土」表紙版画絵販売についての案内

『浄土』七月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―一六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二―八七

阿あ茶ちや局のつぼね  
と  
春かす日がのつぼね局

細ほそ田だ隆りゅう善ぜん

春日局（ふく）は竹千代（三代將軍家光）の乳母として江戸城にきてから、さまざまな苦勞を重ねますが、春日局を支援してくれたのは大先輩の阿茶局です。

初代將軍徳川家康（一六一六没）には二人の正妻と十五人の側室がいましたが、その中でもっとも信頼したのはお梶の方（一六四二没）と阿茶局の二人で、いずれの戦場へも同行さ



—春日局—

せました。

阿茶局は今川氏の臣神尾忠重<sup>あだしげ</sup>の妻でしたが、天正五年（一五七七）忠重没後、旧知の家康に仕え側室となり阿茶局と称しました。局は天性聡明才略のある女丈夫にして、家康が戦場へ赴くときは、女性ではあるが武装して同行し活躍しあれこれ家康の世話をしました。しかし天正十二年（一五八四）小牧・長久手<sup>こまきながくて</sup>の戦いの際、家康の子を宿したまま乗馬同行をしたため流産をしてしまいました。

阿茶局はまた江戸城の初期大奥の制度をかためた人でもあり

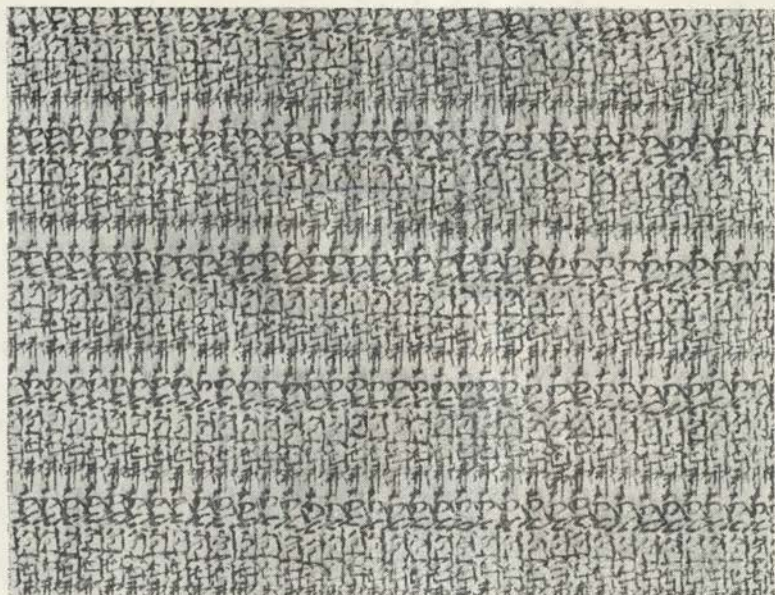
ました。慶長十九年（一六二四）大坂冬の陣のとき、家康の命により大坂城に入り、淀君（一六一五）と接触して和睦を成しとげました。

天和六年（一六二〇）二代將軍秀忠（一六二三没）の娘和子が入内（皇后、中宮が正式に皇居に入ること）をいうるとき將軍の正妻お江の方（一六二六没、崇源院）代理として上京し、また皇女誕生のとき子に親代りとして待した。そのため従一位に叙せられました。また寛永三年（一六二六）後水尾天皇二条城行幸のときは、阿茶局は奉迎饗膳の役をつとめました。

阿茶局は秀忠の没後は剃髪して菩提寺として雲光院を創立し、自ら雲光院と号しました。当時女性で一位に叙せられたものは阿茶局だけでしたので「一位尼公」と称せられました。しかし寛永十四年（一六三七）一月二十二日、

八十三歳の高齡を完うして逝去し、浄土宗の靈光院に葬られました。雲光院はたびたび移転し天和二年（一六八二）現在の深川の地（江東区三好二一七七一四）に移りました。墓は当初のままでの宝篋印塔型の墓碑にして法名は雲光院殿一位尼公正譽周榮大姉と称しました。

一方、春日局は明智光秀（一五八二没）の臣、斉藤利三（一五八二没）の娘「ふく」でした。利三は本能寺の変で殺され、そのさし首を目撃したのは、ふく四歳のときでした。ふくは母に伴われ、父の友人の画家海北友松（一六一五没）の支援をうけて成育し、のちに母方の親戚である稲葉正成（一六二八没）と結婚しました。正成は三十四万石の小早川秀秋（一六〇二）の家老となり、万石を領しました。慶長五年（一四〇〇）関ヶ原の戦で、小早川秀秋は



——徳川家康が戦死した敵、味方の霊を  
供養するために書いた、念仏——

徳川家康に急拠内応して、徳川  
方勝利の原因となりました。そ  
れは十九歳の秀秋を助けた正成  
の力でありました。この功績に  
よって秀秋は岡山五十一万の大  
大名となり、正成はその家老と  
して活躍しましたが、秀秋は慶  
長七年（一六〇二）病死し、嗣子  
がないため小早川家は断絶、以  
来正成夫婦は美濃に蟄居する浪  
々の身となりました。慶長九年  
（一六〇四）秀忠の正妻お江の方  
（一六二六没）が男子を出産、家  
康は可愛い直系の孫であるので  
自分の幼名の竹千代と命名し、  
將軍職を世襲させる決心をしま

した。このときふく（春日局）の運命を変える  
ことになりました。家康は竹千代の保育係教  
育係をつとめる乳母ちちの役を重視しました。乳  
母は「めのと」ともいい授乳ちちだけでなく、教  
育係のみならず女官長を役をつとめた重職で  
あるので、家康は京都所司代板倉勝重いさくら かつしげ（六二四  
没）に適任者を探させました。その中から苦  
勞、経験を積んだ才女が望ましいと考えまし  
た。たまたま同年に男子を出産したふくに白  
羽の矢が当り、ふくを乳母として江戸城へ送  
りました。

ふくは家康の命令で出仕したこと大切にし、  
正成がそれをよく理解し、子供たちは母親が  
面倒をみることにして、一子を連れて江戸城  
に向いました。ふくは江戸城では孤軍奮闘で  
したが、家康の命であることを尊重しまし

た。ところが家康の意向を大切にする阿茶局  
が大奥にいて、何かとふくを支援してくれた  
ことが大きな支柱となりました。竹千代出産  
後、二年にしてお江の方は国松くにまつ（忠長）を出産  
し、竹千代はふくにまかしたが、国松は自ら  
が養育し、これを溺愛できあいするようになりました。  
やがて、竹千代をさげすむ仕草が目立つよう  
になりましたが、ふくは一步も引き下がるこ  
となく竹千代を養育しました。このときにも  
阿茶局はふくをはげしました。

ところが大名たちは、秀忠とお江の方が竹  
千代よりも国松を大切にするとところから、三  
代將軍は国松と思い竹千代をさけて国松に挨  
拶するようになりました。それを察知したふ  
くは元和二年（一六一五）、家康に直訴しまし  
た。家康も徳川家が分立することは天下を再



——阿茶局の墓（江東区三好・雲光院）——

び乱すことになることを心配して、秀忠、お江の方、諸臣に竹千代が三代將軍になることを明言しました。

元和六年（一六二〇）ふくは秀忠の内意をうけて上洛し、天盃を賜り、このときに「春日局」の号を賜りました。春日局は正成と離婚して家光の先々を見守ることにしました。家光は元和九年（一六三三）三代將軍となり武家諸法度、職制、兵制、参勤交代制、在府妻子の制などの諸制度を確立して、幕政を安定させた功績は大きいものでした。

春日局は幼少のころ支援をうけた海北友松の遺児海北友雪（一六七七没）の世話をし、また寛永十七年（一六四〇）上洛したとき、崇源院お江の方と国松（忠長）の母子の冥福を祈るため、京都黒谷浄土宗大本山の金戒光明寺に

立派な供養塔を建設しました。忠長は寛永元年（一六二四）五十万石を領し駿府城に居しましたが、寛永八年（一六三二）大逆不道の罪を受け蟄居を命ぜられ翌年上野高崎城に預けられ、秀忠の死を知り寛永十年自刃しました。

春日局は湯島に菩提寺麟祥院を創立しました（文京区湯島臨濟宗妙心寺派）た。局は寛永二十年（一六四三）九月十四日、六十五歳で逝去し、同寺に埋葬し、家光はこのとき一週間の喪に服しました。法名は麟祥院仁淵了義と称し、墓は卵形墓で当時のままの姿を残しています。卵形の笠名はめずらしく南北東西に本が入るほどの穴があけてあります。よく雀が入りして遊んでいます。この穴は春日局が江戸城の大奥並びに政務にたずさわる者たちを監視するためであるといわれています。大奥の



——春日局の墓（文京区湯島・麟祥院）——

＜日本図書館協会選定図書＞

## 『江戸物語』

細田 隆 善／豊明／著

- 四六判／浮世絵ほか写真・図版一五〇点収録
- 定価一八〇〇円【付Ⅱ名所史跡・資料館案内】

△発行・発売▽ ノンブル社

東京都新宿区新小川町六―三九―七〇一  
電話(〇三三)二六九―一二九三 二六七―六六三七  
振替(東京)七一―一〇九三／〒二六二

制度はしだいに確立され二千人の女性軍団を擁し、それに二十階の職階制が設けられるようになりますが、その基礎は春日局のとき確立されました。春日局がつとめを果たしたのは家康の命を尊重したことで主人正成が理解をもってくれたこと、さらに大先輩である阿茶局が影になり日なたになって支援してくれた

ことであります。

昨年一年間、日曜毎のテレビ放映「春日局」が大いに人気を博し、その中で阿茶局のことも放映されました。

湯島なる春日局の墓石の

穴に出入りする雀の優し 細田豊明

最新好評のトラクト

竹 中 信 常 著

# 佛 心 凡 情

ポケット版二四六頁  
イラスト入り

佛さまの心で現代の世相を思い、これを凡人のわれわれに分りやすく説いた  
文集。法話の材料または施本として御利用下さい。

定価 五〇〇円      下料 二一〇円

《発行・発売》

大 道 社

〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六  
電話(〇三)二六二―五九四四 振替(東京)一―八二四七

第五十六卷

七月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行  
平成二年六月二十五日印刷 平成二年七月一日発行

## ◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。）
- 一、枚数 四百字詰用紙六～十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人讃仰会

### 「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十六巻 七月号

昭和十年五月二十日  
第三種郵便物認可

平成二年六月二十五日 印刷  
平成二年七月一日 発行

編集人 宮林 昭彦  
発行人 佐藤 密雄  
印刷所 長谷川印刷機

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番  
〒（二三） 振替東京八一八二一八七番